

Iターン農業とIターン移住

農村社会・社会学特殊研究 第3話

秋津元輝(農学研究科)

「ターン」の定義

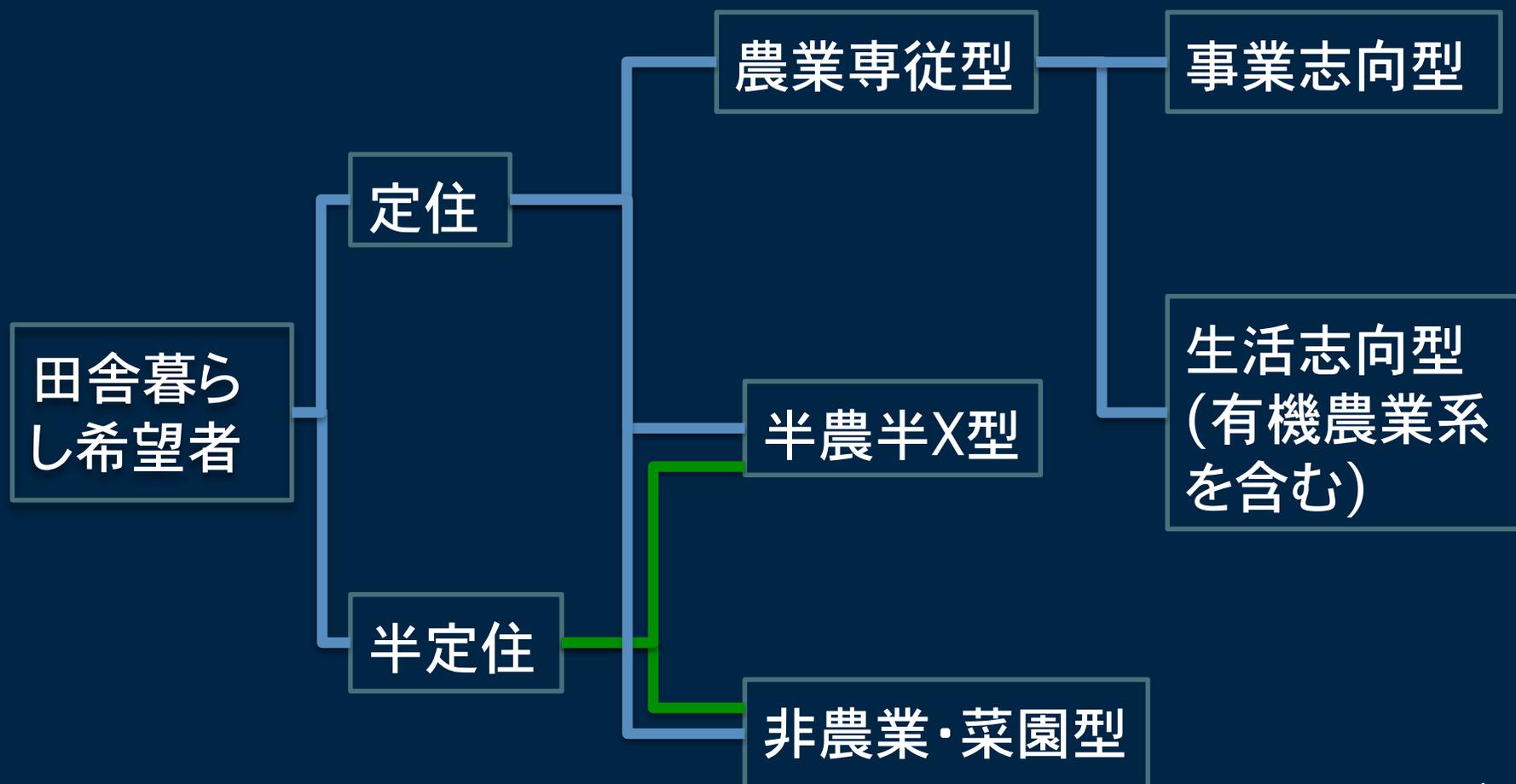
- 「大都市圏住民による、係累のない、主観的に〈田舎〉と定義された土地への、自発的移住」(菅:1999、141)
 - 人の定義
 - 必ずしも限定する必要はない
 - 行き先の定義
 - 遠い係累を頼る場合もある
 - 意思の存在

Iターン研究の意義

- 農業と農村の維持・発展
 - 農業会議や京都府など、行政との共同
- 農山村社会変化の研究
 - 変化の起爆剤として
- 現代人生研究
 - 住み処と人生
- Iターン者としての女性
 - 女性と婚入について

1 ターン希望者の分類 1

(農業を指標とした場合)



移住意向の年代別・男女別実態

	20～30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
移住形態	仕事をしながら定住		仕事をしながら定住または滞在	悠々自適な生活で定住または滞在
移住時期	農村での就業決定後	農村での住居決定後	定年退職後	農村での住居決定後または今すぐに
農業指向	男: 主な職業 女: 自給的農業	男: 副業 女: 自給的農業	男: 自給的農業 女: 家庭菜園程度	
住宅の立地条件	男: 集落のなかで混在 女: 新たな世帯の集合地	集落のなかで混在	男: 集落から少し離れた一軒家 女: 集落のなかで混在	集落から少し離れた一軒家

中西宏彰・桂明宏「田舎暮らし希望者のニーズと支援方策に関する研究—京都府における田舎暮らし希望者に対するアンケートに基づいて—」、『農林業問題研究』,第43巻第1号(2007),pp.95～100,より。

1 ターン者の分類：参考

(動機と指標とした場合)

- 子供の生活環境の一新などを目的とした生活上、心身上の剥奪的動機による者
- 都市否定、文明否定型の移住者
- 職業・生業へのこだわりをもつ者
- 景観や自然を愛でながら農村生活を楽しむ者

(菅、1999、151-157)

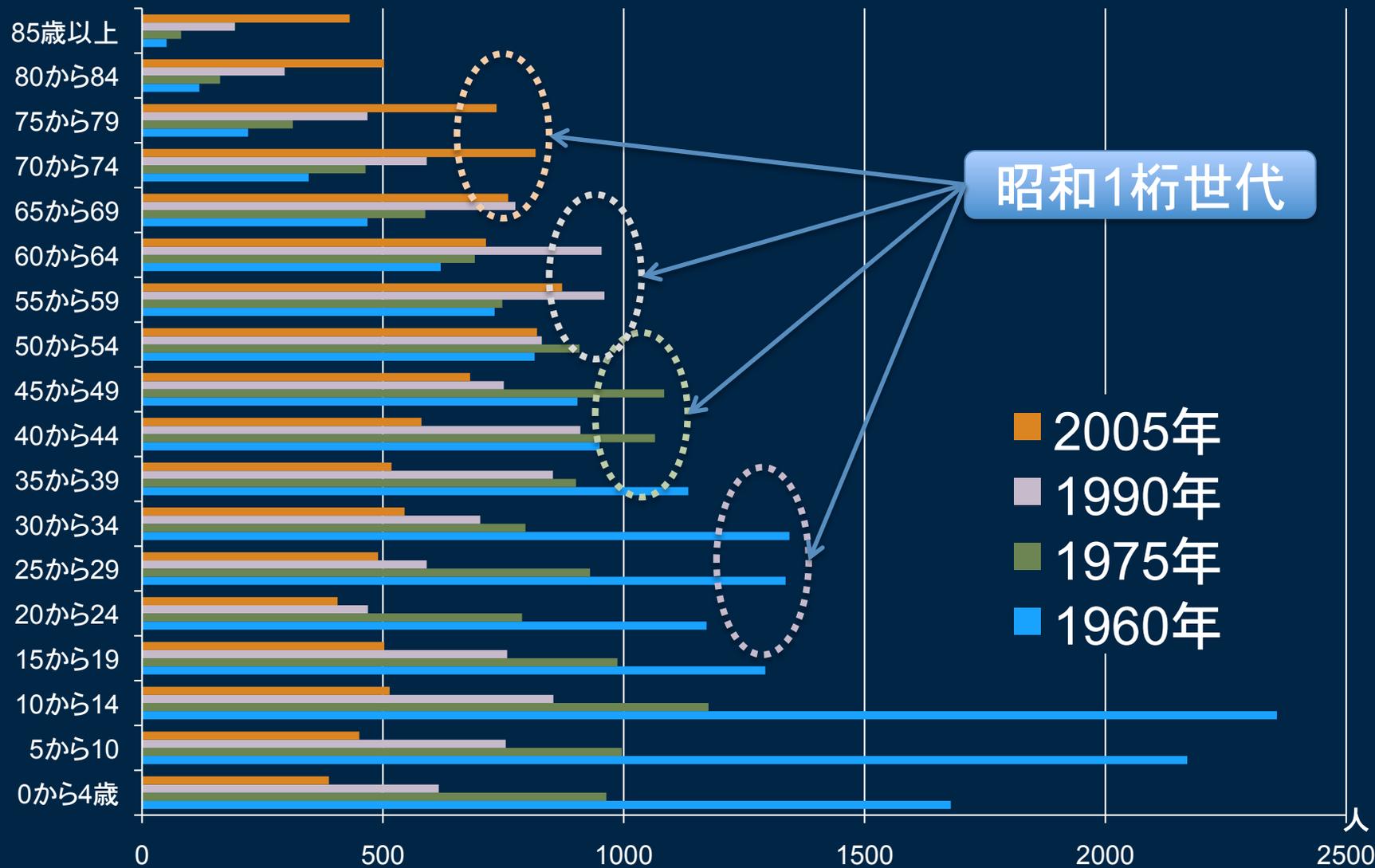
農業 | ターンの戦後史1

- ・ 1960年代まで
 - 既存システムの中での受け入れ
 - 引き揚げ者によるもの
 - ・ 1950年代前半までは夢もあった
- ・ 1970年代
 - 学生運動(と挫折)、社会とは何か
 - むら社会の厚い壁

過疎地域の人口ピラミッド変化

(平成20年4月現在の過疎地域について)

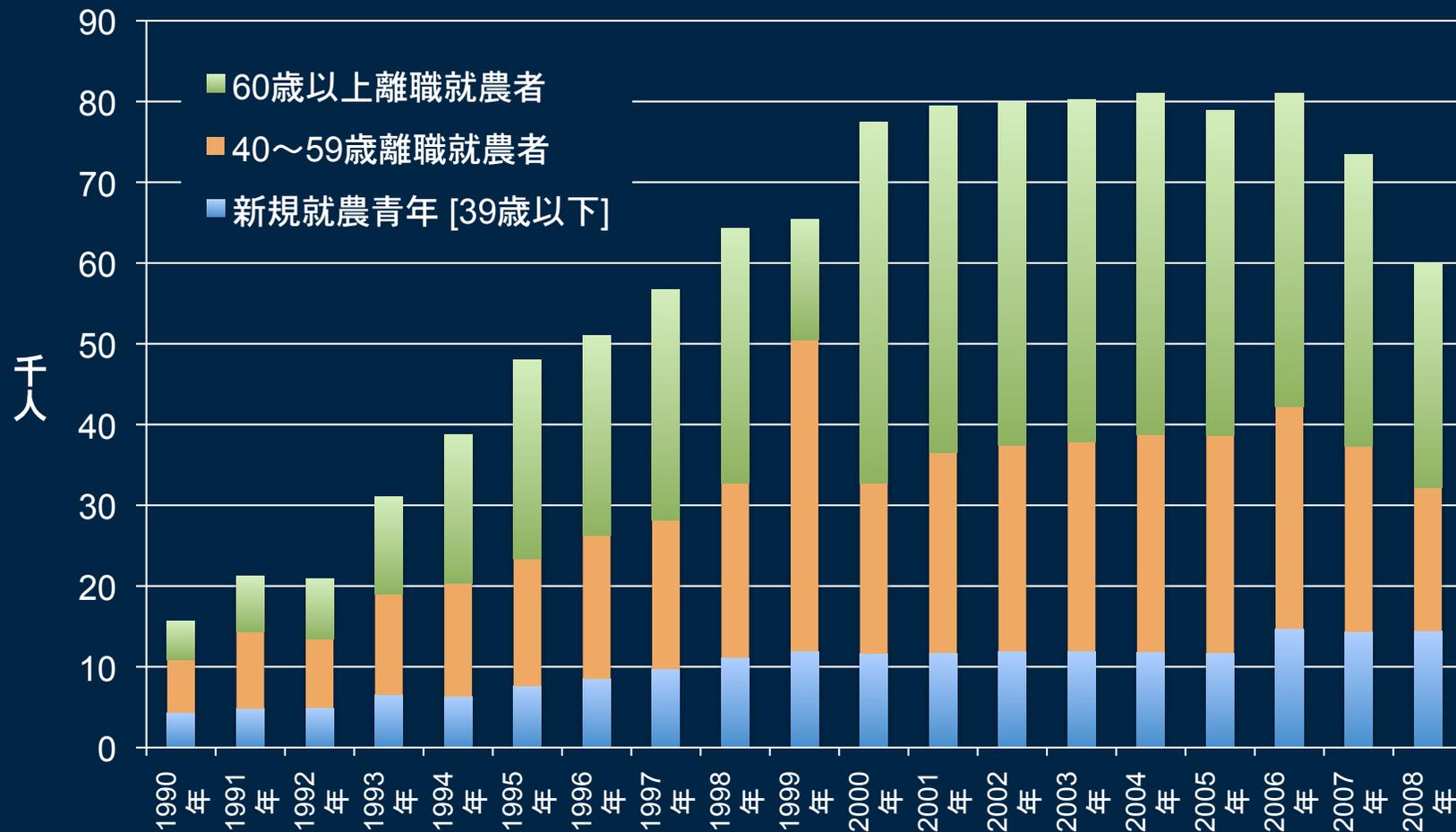
過疎地域(平成20年度)における年齢階層別人口の変化



農業 | ターンの戦後史2

- ・ 1985年頃以降
 - 食べ物の安全性
 - 肩の力が抜ける=個人の实践として
 - むら社会の弱体化
 - ・ 過疎地を支えた世代の高齢化
 - ・ 将来展望も個人的になる←跡継ぎ不在

1990年以降の新規就農者の推移



新規就農者・・・就業状態が、「学生」→「農業が主」(新規学卒就農者)、「勤務が主」→「農業が主」(離職就農者。在宅、Uターンを問わない)

農業・ターンの戦後史3

- ・ 1995年頃以降
 - 制度の充実、メディアの注目
 - ・ 新規就農ガイドセンター(1987-)
 - ・ 『田舎暮らしの本』(1987創刊)
- ・ 2005年頃以降
 - 多様な世代の農村移住(滞在)

農村移住の課題(入る側から)

- 借りうる農地はある
 - 悪い場所から引き受けて、いい場所へ
- 住む場所がない
 - 新築・間借りならできる
- むらの慣習がめんどくさい
 - 慣習とのつきあい方

進化するIターン者

- ・ 直後：自己完結的な農業生活
 - 罪のない職業←環境的罪悪感
 - よくわかる生活＝生産と消費の再結合
- ・ その後：新たな生活の組織化
 - 前職の再活用
 - ・ 生産から流通へ
 - ・ 教育活動への広がり

新旧住民のあいだの「壁」

- 時間がたっても残る居つき者との壁
 - 「馴染めている」と「距離がある」の違い
 - 南丹市美山町1集落での調査結果(下表)

		農村側住民との親密度(人、%)		
		馴染めている	あまり馴染めていない	合計
移住後の年数	3年以内	3(37.5)	5(62.5)	8(100)
	3～5年	0	2(100)	2(100)
	5～10年	1(100)	0	1(100)
	10～20年	4(100)	0	4(100)
合計		8(53.3)	7(46.7)	15(100)

		農村側住民との距離(人、%)		
		感じない	感じる	合計
移住後の年数	3年以内	6(75)	2(25)	8(100)
	3～5年	0	2(100)	2(100)
	5～10年	1(100)	0	1(100)
	10～20年	2(50)	2(50)	4(100)
合計		9(53.3)	7(46.7)	15(100)

(京都府農業会議「京の田舎ぐらし受け皿組織に関する検討会」、2008.1.29資料、京都府農業総合研究所、中西宏彰氏提供)

第1レベルと第2レベル

- むらのメンバーシップ
 - 生きて居る者
 - 死者・未来世代を含める
- 移住者と空き家問題
 - 農地はでてくるが空き家は出てこない
 - 場所・過去・死者(先祖)・他の第2レベルメンバーとのつながり

地域資源管理の今後

- 「農地・水・環境保全向上対策」
 - 都市近郊と遠隔地
- 田畑・山の管理問題へのヒント
 - 第2レベルのメンバーを基準にした管理
 - 別のかたちへ
 - 公的支援のあり方
 - 農地・山林の公共性

文献

- 秋津元輝「農業の社会学-誰がどう農業を担うのか」
祖田・杉村編『食と農を学ぶ人のために』世界思想社、
2010年5月、127-145頁
- 秋津元輝「多様化する農業者のかたち」（柘瀨俊子・
松村和則編『食・農・からだの社会学』）新曜社、2002
年11月、124-141頁
- 秋津元輝「Iターンの実践とIターン研究の実践」祖田
修監修（『持続的農業農村の展望』大明堂、2003年3
月、153-166頁
- 菅康弘「脱都市移住者の群像- 'stranger-native
interaction' の理解のために」『甲南大学紀要』文学編
109、1999年